

## 「緑」について考えよう

樹木や草花など植物の総称として「緑（みどり）」と呼ぶ。緑と聞くと、管理が大変で厄介なものとする方もいるだろう。一方で、お花や庭木の世話、野菜づくりなどが好きで、敷地一杯に緑を取り込んで生活している方もいる。ここでは改めて緑が私たちにとってどのような意味をもっているのか考えてみたい。

### ◆ 緑は「生命と生長」の象徴

日本において 701 年に制定された大宝律令には、3 歳以下の子供を「緑」と呼ぶ規定があった。赤ちゃんを嬰兒（みどりご）と呼ぶのも、新しく誕生した「生命」が、新芽や若葉のように「生命力」に溢れているからなのだろう。造園家・進士五十八氏によると、グリーン（green）の語源であるアリアン語のガーラ（ghra）には、「生長する」という意味があるという（「アメニティ・デザイン」より）。緑は日本でも西洋でも「生命」や「生長」といった意味を持っていることが分かる。私自身も 3 歳の娘（大宝律令で言うところの緑）がいるが、手に負えない程の「生命力」に溢れながらも、まさに日々「成長」しており、その姿を見るのが家族の大きな楽しみとなっている。



新潟市 花育の日

私が緑を扱う上で大切だと感じていることは、まさにこの「生命性」と、生長し、変化するという「生物性」を感じることである。大きくなりすぎたり、虫が付いたり、病気になったり、枯れたりすると、緑のお世話は大変だが、毎年決まった時期になると芽吹き、花を咲かせ、実を結び、落葉する。このように変化し、生長する生命だからこそ、私たちに感動を与えてくれるのではないだろうか。レイチェル・カーソンは、「美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なるものに触れたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになる。子供たちにとって「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない」と述べている（「センス・オブ・ワンダー」より）。緑が私たちに不思議さや感動を与えてくれるのも、まさしく緑が生きているからのように思う。

### ◆ アタカマ砂漠で見た緑

以前南米・チリにあるアタカマ砂漠を訪れたことがある。アタカマ砂漠は年平均降水量が 10mm 程度しかなく、世界で最も乾燥した砂漠と言われている。これだけ生き物の生存にとって過酷な環境でありながらも、アタカマのオアシスに人間の営みがあることを知り、驚きと感動を覚えた。私たちの住む日本は四方を海に囲まれ、年間降水量も 1500mm 以上、さらに国土の 67%が森林に覆われている。日本に居る時は当たり前のように感じていた緑の存在も、過酷なアタカマのオアシスでは、強烈な存在感を持っていた。端的に「人間は、水と緑なしでは生きることが出来ない」ということに気づかされた瞬間であった。地理学者・J・アップルトンは「人は、樹木をみると、その付近に水があることを無意識に意識し、そこに生命を維持できる空間があることを認識する」と述べている（「風景の経験」より）。私たちが緑を求めるのは、生物としての人間が、より本能的に生存に適した環境を無意識に選択しているからなのかもしれない。

### ◆ 人間社会とは無関係な世界

私たちにとってより身近な緑は他にどんな意味をもつのだろうか。養老孟司氏は、「人間の意思とは無関係に広がっている花鳥風月の世界の存在を意識すること」の大切さを述べている（「庭は手入れをするもんだ」より）。都市化が進み、身の回りの多くが機械化、人工化する中で、私たちの生活は効率的、合理的になり、便利な反面、ストレスの多い社会を生み出してもいる。一方で緑は、私たちの意識とは無関係に存在し、日々動いている。人間社会とは別の世界を日常のどこかで意識することで、多少なりともストレスから解放され、心を開放することができるのではないだろうか。ニューヨークのマンハッタンに広大なセントラル・パークを設計した造園家のオルムステッドも「緑の自然が人々の健康や体力を回復させる性質を持っていることを強く信じた」という。事実、セントラル・パークがニュー Yorker にとっての「憩いの場」になっていることを私自身も訪れて見聞きした。人工的な空間に、緑という自然を持つことは、単に「ものとしての緑」、「装飾としての緑」以上の意味を持つのである。

### ◆ 緑を育てる意義

私は花育の本質を、単に花を育てることではなく、「花を育てる心を育むことである」と理解している。それは、私自身が緑を育てながら、いつも緑に他者への労りの心を育ててもらっていると感じているからである。園芸家のチャールズ・A・ルイスも「植物が生長する時、人はその美しい植物よりも、もっと美しい人として成長している」と述べている（「植物と人間の絆」より）。日々の生活や仕事に囚われながらも、緑の世話をする時間と心のゆとりを持つことが、子供たちの人間形成にも、私たち大人にも良い効用をもたらしてくれると信じている。



### プロフィール

土沼 直亮（どぬま なおあき） 株式会社 要松園コーポレーション専務取締役・造園家

1 級造園技能士・1 級造園施工管理技士・NHK カルチャー新潟教室講師「新潟の名園めぐり」・にいがた庭園文化交流協会理事

代表的な展示・作品にスウェーデン・ウプサラ大学リンネ植物園での作庭展示（2014）、デンマーク・フレソ市ファラム文化センター庭園築造（2016）などがある。